

29

特255

134

將 山本英輔著

55

大義名分に終始せる大西郷

天皇中心道

(續編)

附日本精神作興の根源

日本協會發行



38
24

始



特 255
134

本書は昨年七月三日發行せる本會顧問海軍大將山本英輔閣下の「日本臣民道は即ち天皇中心道なり」の續編をなすもので、大西郷の天皇中心道が論ぜられてあります。大西郷の大義名分に終始せる偉大なる功業は、今日萬人の仰慕する所でありますが、殊に庄内藩歸順に對する處置は實に天皇中心道を身を以て示現せるものにして、其の至誠と大腹中には感涙を止めることが出来ません。今次事變に處する國內の問題は今後益々重大性を加へるものと思ひますが此の大西郷の一點私心なき至誠、即ち天皇中心の大精神は全國民の銘記すべき所であると信じます。

山本閣下は近時益々御健康にて、毎日早朝より年來御發願の御研究に精進せられつゝあり、其の間接客に執筆に讀書に多忙な日々を過して居られますが、特に本會の事業に就ては幾多の御指導と御鞭撻を御與へ下さると共に、講演會には毎回御出席下されて、其の御温容は出席會員諸氏の仰慕する所となつて居ります。(編者)

目次

一、中心道と西郷南洲先生……………二
二、大西郷の庄内藩歸順に對する處置……………四
 ▽先生の出羽着……………五
 ▽庄内藩の降伏……………一〇
 ▽大西郷の赤心に庄内藩悉く悦服す……………一六
三、天皇中心の大西郷を語る……………二三
四、大西郷と大義名分……………三二
五、至誠は治國平天下の要諦……………三八
六、結言……………四〇
附録 日本精神作興の根源……………四二
 ▽軍艦出雲を永久に生かせ▽億兆一心
 ▽惟神の大道に行き詰りなし▽文徳武功
 ▽天地の恩恵を知れ



海軍大將 山本英輔 著

天皇中心道 (續編)

附 日本精神作興の根源



日本協會發行

天皇中心道 (續編)

海軍大將 山本英輔 著

一、中心道と西郷南洲先生

日本は建國の始めから 天皇中心寧ろ 天皇至上の主義であつた。皇祖天照大神は三種の神器を皇孫に御授けになり、統治の大本を御示しになつて、豊葦原の中國を安らげく平らげく知食せと宣はせられ、治國平天下の要諦は、武力で征服し、殺戮を行ふにあらざして、言向和して又に颯らずして平和の治世を實現することにあつた。此の建國の理想を體得し、天皇中心の道を以て天下を治めるに努力し、顯著なる成績を挙げた大人物は明治維新三傑の一人である西郷南洲先生であつた。大西郷は倒幕に當つて常に世界の形勢を説き、兄弟牆に閔ぐの秋にあらざるを高調し、速かに 天子の下に歸順し、一君萬民の實を擧ぐべきを唱へ、其の歸順を見るや、今迄の敵も亦齊しく 天子の赤子なりと 一視同仁の心を以て寛大の處置をなし、速かに國內の統一を圖つた。

吾々は明治維新の歴史を緝く度に、江戸城の明渡し、庄内藩歸順の處置に、感激の餘り落涙するのである。日本古來の武術の秘傳中に「來れば即迎へ、去れば則送る、對すれば則和す、五五ノ十、二八ノ十、一九ノ十、是を以て和すべし」、云々とある。余は之れは治國平天下の要諦、言向和すと一致するものと思ふ。之れを實地に應用せられたのが大西郷であると思ふ。

余は世界大戰の時、獨逸に大西郷の如き英傑が居つたならば、露國との媾和條約に於てアンナ苛酷な又細かいことを規定せず大綱みに大綱を定め、露國の力を有利に利用して大勝利を博したに相違ないと思ふ。要するに敵を征服するには、敵より力強ければ勝つのである。しかし勝つには勝つが其の結果は勝者も力を弱められる。假令ば、五の力に對し七の力を以てせば五を潰すことは出来るが、其の殘存勢力は「100」にとなるのである。然るに大西郷の執られた方法によると、言向け和せて歸順せしめ、敵の力をも自分に利用するから、其結果は「100」にとなるのである。余は常に之を理想として居るから、力を以て倒せしものは力を以て倒される。どうしても徳には及ばない。力は一時的であるが徳は永久的であるとの考へを持つて居る。余が大正十五年の練習艦隊航路を米國に取らずして地中海を望んだことは、米國の如き國土廣大、富力資源無限、天空を衝く大廈高樓に若き候補生等を驚嘆せしむるよりも、國歩艱難のドン底より國家を救

ひたる土耳其の「ケマルパシヤ」大統領や、伊太利「ムツソリーニ」首相の治績を實地に見聞せしむる方が、貧乏國として生成發展の道を講ずるに益する所多かるべく、殊に大西郷の「徳政」と「ム」首相の「力」の政治との比較などの好奇心もあつたのである。其の所見は後段述ぶることとし、先づ大西郷の天皇中心論や、言向け和せの實績につき記述を進めることとする。

二、大西郷の庄内藩歸順に對する處置

次に掲ぐることは、戊辰の役に大西郷に従ひ、征討の軍に加はつた薩摩の石井平太氏が、故伊東元帥や、故上村海軍大將等に勧められ、大西郷の深意直話を書かれた「大西郷の心の奥底」より抜萃したものである。

之れによると庄内藩歸順の處置に當りて、大西郷自身直接其の衝に當られ、其の應對振りに感極まつて覺えず落涙するのであるが、又他の説によれば大西郷は蔭の黒幕となつて一切の指圖をせられ、表面直接の衝に當つたのは黒田清隆であつたと云ふことであるが、其の孰れにしても大西郷の精神に變りはないと考へられるから、寧ろ劇的感激の情を深からしむる石井蘇山氏の著書「大西郷の心の奥底」から抜萃することにしたのである。

先生の出羽著

大西郷は八月二十五日に土崎に着港されて軍の模様を聞かれ、直ぐと米澤藩の重役に面會を求められた。さうして諄々として歸順の大義なること、上杉家の他藩と異なる所以から、謙信公も終始勤皇の精神で在られたことや、上洛の事から、皇室に盡くされたことを語り、會津と共に官兵と戦ふの非なることを説かれた。家老の千坂某は答ふるに、會津の降伏を世良が受付けなんだ事から、此の戦ひは薩長の求むる私闘であると斷じて、奥羽二十六藩連盟したことを述べ、事實官兵なれば官兵の様に朝旨を遵奉されたいと希望した。大西郷は「御尤ものことです、私は朝旨に背く様なことは致しませぬ」と答へられ、手もなく米澤藩は歸順した。

大西郷は又此の米澤藩の重役から庄内藩の歸順を勧めさせた。庄内藩も、事實官兵で朝旨を行ふとなれば何の異議があらう。されど昨年は江戸の薩摩邸を砲撃したこともあり、容易には大西郷の言を信じ得ないのであつたが、何にせよ、大西郷は總てが胸襟を披いて語られ、江戸城の授受でさへも目録書で済ませた程、一諾は一死以て之れを貫ぬかるゝ人格であり、誠實の性格、親切な心術であることが天下周知の事實であるから、兎に角陣中で會談して意中を交換し、其れか

らの決心となつた。

庄内の重役松平新八郎、酒井兵部を筆頭に、監察、小姓頭、番頭、御使番、御納戸頭などいふ利権者許り七人揃うて大西郷に面會に來た。大西郷は只一人、書役一人を引き連れて平然と出て來られ、先づ一應の挨拶があつて、

「汝々方よう御出で下された。今日は陣中ぢや敵ぢや、と云ふことをやめ、打寛いで相互の意見を交換致しませう」

と出られた。只の一言なれど、重さ千斤で、意味が深長である。「ハツ」と先づ兵部から口を切つた。「昨年京都以來の行違ひや、江戸の御邸砲撃で、貴藩とは犬猿も雷ならぬことに相成り、今度の戦争も……」と遣り出すと、大西郷「チョツト」と手を振つて、

「薩摩ぢや庄内藩ぢや、といふことは止めて下さらんか、既往は咎めず置き置かんと、錦旗に向つて發砲なされた事もあるので洗ひ立てをしますと、えらい面妖に成り申すで、そりや一切打ちりに致してな、目前の戦争を止めるか、止めぬか、酒井家を將來どうするか、潰すか建てるか、天子様をどう見るか、庄内領の百姓を助けるか、助けんかちゆ事が大事で御座らう。汝々方の後方には露西亞ちう大きな鷲が爪を磨き濟まして抓まう、喙ばまうと睨んで居りますぞ、御互が日

本國で兄弟喧嘩などして居る時ぢやないと私は思つて居りますが」と言はれると「ハイ」と返事した切りで庄内藩の重役等は黙々然と顔を見合せて居る許り、そこで果しは附かずと、松平新八郎、ズイト疊の上一尺許り進み出で、貴殿は只今 天子様をどう見るかと仰せられたが、我々とても 皇國の一員なれば 天子様は萬乗の君といふ位は辨へて居ります故、天子様の御差し向けになつた官兵ならば、手を束ね爲さるゝが儘に御任せ申すで御座るが、茲に我々が御聞き申して置かねばならんのは、主家の酒井左衛門儀に御座ります。これは歸順降伏と成りましたら、いかやうの御處置振りに相成ませうや、隠居は勿論で御座らうが、寺入りの後、武士の面目丈けは御立て下されて、切腹といふ事位で御濟ませ下されませうや。又は網乗物で京都送りでも仰せ付けらるゝ儀で御座らうや。一應貴殿の御内意が承はり置きたう御座るが、と言ひ出した。大西郷ニヤ／＼笑ひながら

「これはしたり、汝々方が歸順なされば、私達と兄弟ぢやごわせんか。兄弟の御主人は私達の御主人も同様でありますぞ。隠居は此方からは兎や角く申さんけれど、先づ御遠慮として雅樂頭様より御願出の方がよう御座らう。寺入りにも及び申すまい。慶喜公の寺入りも、御自分から大慈院へ御遣入りに成らせられたので、拙者が申渡した筋ぢや御座らん」と答へられた。

「は、あ、して見ると當左衛門は矢張り當庄内に御置き下さりませうか」

「はあい、勿論の事、歸順の手續きが済めば、只今でもよい様にして上げませう」

「は、有難き仕合せに存じます。して又歸順降伏の手續きはいかゞ致したもので御座らうか」

「はあ、左様で御座るな、江戸城受取りも拙者が致し申したが、何もかも目録書で済ませ申して御座れば、其の例に倣ふて、大砲が何門、小銃が何挺、彈藥が何程、城付き什物が何々、兵糧が何程、軍用金が何程、此の軍用金も酒井家の御手元金も御座らうで、其れは御取り除きで殿様へ御差し上げになつて、御不自由をさせんごと成さらんと、後で御困りで御座らう。又城内御住居なれば此が城付き、是から何處までは御殿であると御極めになつてな、まあそんなことでよう御座らう」と言はれたので重役等煙に巻かれ、狐にでもつまゝれたやうな感じがしてならん。今度は大目付の某進み出で、言ふには、

「時に歸順降伏で御座れば、左衛門は無腰麻袴の無紋を着しまして、こちらへ罷り出でますので御座らうな、山鹿流に従ひませうや、小笠原流に依りませうや、準備も御座れば、念の爲に伺ひ置きたく御座るが」

「ほう、山鹿流ちや、小笠原流ちやと、拙者そんなことは一向に存ぜぬ。それに殿様をこれへ御

連れ申すなんて、そんなこと汝方主従のよしみとして、出來申すことで御座るか」

「は、然らば降伏の式は如何取り計らひませうや」

「いや知れたこと、拙者は元が陪臣で御座いますぞ、私から殿様に伺ひ申し上げるで、其の時一寸御會釋が在らせられ、ば宜しいです。無腰で此處へ連れて來るなんて、そのやうな主君を輕々しく扱ふ御家來なら、拙者は其の様な人は頼母しく思ひ申さん」とえらい不機嫌で叱り付けた。ハツト許り、重役一同あつけにとられてしまった。大西郷は官軍の大參謀だが、何だか自分達庄内の方の家老のやうな氣もする。七人が七人、皆酔つてしまった。「いや何分大參謀殿に於て宜しう御願ひ仕る」と御辭儀した。

「はい承知致した、さてかうなつて見ればどうで御座らう、拙者達も草臥れちよるし、汝方も四月以來の戦争で御苦勞思ひやらるゝで御座る。まして兵士は猶更でござれば、今日より休戦と致して、皆を休ませようでは御座らんか、どうで御座るな」と切り出された。はあと言ふて見たが誰もうんとも言はん。腹の底では「休戦なんて油斷させて置いて不意の夜襲でも喰はせるのぢやなからうか、併し待てよ、降伏歸順の下話の序であれば、休戦には不同意とも言はれんが」と、とつおいつの胸の内、大西郷此の態を見て、「いや、ちよつと待つて下され、松平さん、汝は不

意打が名人ぢやさうな、一昨日の晩もそれで大分痛められたさうな、休戦してゐる内に、そんな悪戯しやしませんか」と、これには一同吹き出して「どう致しまして左様な事を」「はあ、せんちゆうことで御座わすか、其れなら安心申した」と大西郷ちつとも人を疑はず、誠意を相手の腹中に置かれるので皆感服して、此に先づ休戦の口約束が出来た。

庄内藩の降伏

庄内藩の重役等は「何分よしなに御願ひ申上げる」と一同辭儀して歸つてしまつた。其れでも萬一を氣遣ふて、内々で警護は十分して、いざといはゞ何時でも戦争に差支ないやうに、松平新八郎、酒井兵部の兩人がすつかり秘密の手配りをして、表面は休戦を装ふて居たのである。

然るに、薩摩の本陣は固よりのこと、花館町全部に居る官軍は何等の準備もせず、三々五々兵士の散歩としゃれのめして、飲めや誦へで騒いで居る。夜襲などは何の氣振りも見えない。明く朝になつたら、酒井兵部や松平新八郎は、内々警備したのが氣恥づかしくなつた。成程西郷は大人物であると始めて心から會得した。催眠術師ではないが、是から先は暗示のまにまに行動する。庄内藩の重役は幾んど催眠術にかゝつて居る。其の翌三十日に城の受渡しを申込んで來た。

「殿様は城を出られて別殿に引移られたから、その御殿に來て呉れ」との案内である。大西郷は「宜しい、承知した、然らば明日正四ツ時（今の午前十時）に參る」と約束された。

其の日大西郷には參謀の島津小平治只一人附添つて書役一人と石井平太と隨行した。城の大手に懸ると、門監が「何者ぞ」と誰何した。大西郷にやり笑つて「いや、これは申遅れて御座る、拙者西郷吉之助で御座る、只今城受取りに參り申したで、其の旨を重役方に通じて下され」と申された。門監の士は且つ驚き且つ怪んで、推返して言ふには「城受取役、西郷さんの御先手で御座るか」と念を推した。「いや拙者が西郷で御座る」へいと許りで徒士は大玄關へ斯くと通じた。兵部、新八郎、權十郎などの家老始め表役十四五人ぞろ／＼と出て來た。「いやこれは大參謀殿には御苦勞様に御座る、いざ先づすつとお進み下され」

「いやこれは兵部殿で御座つたか、御出迎は御苦勞に存する、御免下され」と、泰山の搖ぐが様にゆたり／＼と大手口を這入り「却々御堅固な御城で御座わすな、流石に出羽の雄鎮で御座わす」と城の大玄關に進まれて、土下座の足輕や、高股立の徒士にも軽く默禮されて、大玄關の左右に蹲踞り居る諸士へも挨拶して、執次の間、使者の間を右に見て、大廊下書院、小書院、大廣間へと通られた。こゝには表重役五十餘人、門地寄合、物頭以上三百餘人詰め合つて居る。大西郷は

兵部の案内で設けの席にひたと座り「これは皆さん、御詰合ひ御苦勞、拙者西郷吉之助でござす、これから兄弟と思つて御別懇になつて下され」と述べられ、諸士一同は、つと叩頭黙禮した。兵部は先づ城内に備付けの武器目録を、新八郎は兵糧、軍用金の目録書を、權十郎は諸藩士の知行高帳を奉呈した。大西郷はちらと一同を見て

「これはこちらの控書と校合してあるとてござすか」

「はい、左様に御座りまする」

「は、然らば請取り申す」と書役に渡した。新八郎はにちり出でて「大參謀に申し上げますが、責めて武器丈は御改め御受取にならないでも宜しう御座らうか」

「はあ、拙者等皆忙しうござすで改めることはよしに致さう」

「はあ、然らば城櫓の御一覽を願ひまする」

「いや、それもよしに致さうぢや御座らんか、城を受取り申した處が拙者等が籠る譯でなし、汝等が籠つて守つて居て下さらねばならんから、修繕手入れも手落なくされてな、武器も精々手入をしてな、何時でも御用に立ちますやうにな、其の係り、是迄通り注意して下され」と述べた。

次に勘行奉行が恭々しく白木の臺へ千兩箱二十六個を積上げたのを運ばせ、糧米藏の鍵を手に持ち、へゝえと手を突き「是れは軍用金に御座りまする、どうぞ御改めの上御受取りを」と申出た。大西郷は怪訝な面色でちつと奉行の顔を見て

「軍用金な、目録書になかつたで御座わすかな」

「いやちやんと書いては御座れど、これは現物に御座れば」

「はあ左様で御座わすか、拙者目録丈け受取れば宜いので御座わす、現物は汝方が軍用の時に使ふので御座わすから、御用の時までは今迄通り御支配なされて居て下され」と言はれたので、はつと勘行奉行は後へ下つた。すると大西郷は咳一咳して

「兵部さん、もう用は済んだので御座わせうな」

「ハイ、別にもう此外に……」

「ア、左様なれば、これはこれで御暇と致して、殿の御伺ひを致すで御座らう」と大西郷は立ち上る。

「イヤ、一寸御待ち下さりませ、も一ツ大問題が御座るで」

「ハア、大問題とは何で御座る」

「ハイ、外でも御座らねど、諸般の事柄は總て寛大の御取扱ひで辱けない程に存じ奉りまするが詰合の諸士の中には四月以來の戦争に軍師を致し、又は隊長、組頭等の役を勤めまして官軍と數度の激戦致した者が澤山に居ります。斯く申す某も數度の隊長を勤めましたが、これ等は如何御處分仰付けられませう。今日の城渡しに何とか御申渡しある事と組頭物頭以上の士は悉くこれに詰居りますが、追つて御沙汰に及ばせらるゝので御座らうか、いかゞで御座らう」と問はれたので、大西郷は不興の體で

「これはしたり、兵部さん、それを八釜しう調べ立てをすると、殿様の置場に汝等は困りはなさらんかな、組頭を閉門に申附けますと、半隊長や分隊長が家祿沒收斷絶で御座るぞ、すれば大隊長は流罪か切腹、軍師、家老、用人は無論切腹、さうすると殿様をどう處分しますかな」

「ハッ！」

「兵部さん、拙者は殿様を御殿内の御謹慎で置きたいと思ふちよりますが、隊長から組頭まで夫處分するとなりますと、えらい面倒が起りますで、拙者も當惑致すで御座わすが」

「ハッ、御言葉の勿體なさ、何とも御禮の申さうやうも御座らねど、汝の御引上げの後に、外の御役人が御出張に成りまして、係り／＼の者はどう處分が附いたと聞かれますると、軍役の者共は

大いに答辯に差支へますが、其時はいかゞ御答へ致すで御座らうか伺ひ置きたう存じまする」
「ハア、左様で御座るか、其時は『西郷が一同處分済にした』と御答へなされ、拙者本陣に返り申してから書役に書かせて『庄内藩士一同構ひなし』と書附下げて置きませう』と言はれたので三百餘人の物頭以上の士連も始めて安堵した次第である。

大西郷は城内を出で、左衛門の御殿へと出向はれた。道案内は出迎の奥家老に酒井兵部に松平新八郎、松平權十郎用人大目付、奉行等三十餘人、町奉行を先頭に御殿をさして送り行く、跡に残つた城中諸士の面々嬉し泣きに歎歎泣きする人もある。これが明治十年に、二十一人の庄内藩士が私學校徒に與みした遠因となつたのだ。

一方大西郷は御殿へ着いて、一門家が二人門に袴をつけて出迎へて居る。大西郷恭々しく黙禮されて、殿様の御一門家の主人であることを兵部から聞かれて「これは」と許り態度恭敬に先へは立たれぬ。一門家兩人が「然らば御案内として先導仕る」と先に立つた。大西郷は其の跡に踵隨して玄關へ進まれると、こゝには左衛門殿、同じく袴着用で出迎へて式臺に立つてゐる。兵部が「左衛門に御座ります」と言ふと、大西郷は遙かに下つて、小砂利の上に三つ指を突いて、黙禮された。左衛門驚いて飛んで下り、大西郷の兩手を上げさせて「不肖は左衛門に御座ります

る、先づ兎も角も書院へ御通りを願ひ上げます」と、大西郷は黙して恭しく左側に控へし兵部を願みて

「兵部さん、殿様は先づ〱奥へ御這入りを御願ひ下され、無位の拙者に斯く御丁寧では、將來庄内領を御治め遊ばす御威嚴に係りまする、いづれ書院にて御面會仕つれば、どうぞ殿様には先づ書院へ御着座なされるやう、貴殿から御願ひ下され」と。此の將來庄内藩を御治め遊ばす御威嚴に係りまするの一言は餘程藩士や左衛門殿の耳朶心線に響きしものか、竊に紋服の袖に目を當てた人も見えた。松平權十郎の如きは其の一人で、大西郷に附いて行つた石井平太は傍で見つゝたことである。

大西郷の赤心に庄内藩悉く悦服す

元來大西郷は温恭な人格で、書生でも呼捨てにせず、歸る時は恭しく玄關迄送り出すのが例であつた。されど、此の場合は降伏を見届ける受降使である、大西郷の舉動は餘り謙に過ぎて却つて詔ひに近くないかと石井は疑つた位であつた。左衛門は兵部の注意を容れて奥へ行かれた。大西郷も暫らくして、兵部に促されて書院に通られた。石井は大西郷の佩刀を玄關の上り框で袱紗

に受けて扈從した。

大書院には、左衛門始め一門別家の歴々が七人列席して、次の書院には家老、寄合表役の面々三十人許り控へて居るが、皆遠慮して無腰である。大西郷は一瞥この體に驚かれて、大西郷の差添まで石井に渡された。石井は寡からず面喰つた。山鹿流でも小笠原流でも、かやうの席では大西郷の傍に石井が佩刀を持つた儘着席すべきである。しかも大西郷の左側に着くべきである。さるを今差添まで渡されては、大西郷に踉蹌して進むべきや、使者の間に控へて居るべきか、せめて大西郷の目の届く次の間に控ふべきか分らぬからである。依つて大西郷に問うた。

「もし、先生、私はどこに控へて居りませうか」「うん家老衆の次に控へて居なされ」「はい」と小書院の入口の白壁を楯に取つて控へた。兵部は大西郷を導いて、左衛門の低頭してゐる前を通つて奥の上役の間へ導かんとした。大西郷は大の體をやをら運んで大書院の手前、小書院との境の闕の外の小書院の闕から二枚目の疊へびたりと坐られた。兵部は周章て、つゝいと及び腰に歸つて来て、大西郷に上段に進まんことを請うた。大西郷曰はく、

「拙者は無位の陪臣者ではす。先づ殿を上段に御移し下され。さうなれば拙者は大書院へ罷り出申す」と。兵部は頗る面喰つた。されど詰合ひ一同の藩士の目には涙が濕うて見えた。定めし

感謝の情が溢れたのであらう。兵部は猶も恭しく、

「御言葉では御座れど、此の席は降伏の式を執り行ふ席で御座れば、一旦は是非上席へ御進み下さらねば主人が挨拶に困りますので」大西郷曰はく、

「降伏とは何でござるか、拙者には分り申さぬ。軍さに負けて力盡きて自殺が出来ぬ、そこで手を突いて身を投げ出す、それが降伏でござらう。汝方は軍さには勝通して居らつしやるから、勝敗の上からなら拙者達が降伏で御座るわい。今日は只左衛門様が將軍家の上へ御立ち遊ばす日本の大主君たる 天皇陛下に順正歸服なされたので、拙者は其の御祝儀を申上げやうと思ふて御殿へ御伺ひ申上げたので御座る」と。有繫の執奏役である兵部も、嬉しくやありけん。臉を赤く染めなした。並居る藩士は覺えず、はつと叩頭した。兵部は手を突き、

「然らば主人上席、小刀佩刀苦しう御座るまいか」

「はい、勿論の事」と兵部は立つて左衛門の前へ進み、

「御聞の通り西郷大參謀は今日御歸順の御祝辭を申上げに參られたさうに御座れば、殿には小刀を御佩き遊ばして上段の間御着坐御會釋終つて、スルメ勝栗にて御一獻の事に致したう存じます」と申上げると、左衛門は兩手を合はせん許りに心に感謝せられる

「先づ／＼西郷さんに小刀御佩用を遊ばすやう、予もともども佩用致すであらう」と先生に挨拶して上段の間へ着坐した。大西郷も大書院の關際まで進まれた。三十餘人の列席者は無言なれども何となくどよめき渡つた。殺氣が消えて靄々の瑞氣が満ちて來たやうな感じがした。

昨日迄敵として戦ふた石井でさへさう感じたのである。まして生殺、與奪、侮辱、尊敬どの目が出るか、壺振りの西郷吉之助何を出さうと勝手自由の權利である。それが庄内藩士の望外なる幸福、即ち武士は食はねど高楊枝なる名譽心を盈たすに十分なる恭敬の態度と「降伏では御座らぬ。軍には汝方が勝つて御座る」と言はれては、如何に押へ付けて置いた溜飲もごろ／＼ごろつと下らざるを得んではないか、大西郷は左衛門に向はれて、叩頭一番、

「今日は汝様には 天皇陛下の大稜威の下に順正歸服遊ばされました、藩士は勿論御領内の農工商民一同も、外臣たるこの吉之助も、大慶至極に存じまして御祝辭を申上げます」と言はれた。左衛門も恭しくしとねを下りて、

「これは西郷大參謀には始めて御意得る。今春以來、武士の意氣地で戦争を致したなれど、固より朝廷に反抗するといふ精神は毛頭御座らん。然るを今度貴殿の御芳志に依りまして不肖の自分より藩の者一統領民一同安堵の胸を撫で下しましたのは皆貴殿の御芳志に出づること、左衛門誓

つて此の御厚誼は忘却は仕らぬ」と。

「はは、御言葉承り、恐縮の至りに存じ申す。只今も仰せられた如く、領民即ち天子の赤子を御預り遊ばして居らるゝのであるから、此の上とても御領民を塗炭の苦に陥れらるゝことのなきやう、御願ひ申すで御座ります。又御家は將軍大老職の名家且つ奥羽の重鎮で御座れば、これまで將軍家へ盡されたる忠誠を天朝へ移して鎮護國家の御奉公あらせ給はれんこと吉之助吳々も希望致し申す」と。左衛門は丁寧叩頭して、

「御高論いかにも肺肝に銘じて御座る」と。此の時兵部はついと出で来て左衛門に默禮して、
「殿に申上げます。かやうに目出度きことは近來にないことに御座れば、西郷大參謀と殿と一獻御取り替はせ御別懇の眞意を表はされまして、我々共へも御流れ頂戴仰せ付けられたう御座りまする」

「むゝ尤もぢや、然らば席を改めて離れの廣間と致さう。大參謀にはかう御運びあれ」と左衛門手づから大西郷の手を執つて引立てらるれば、大西郷も辭するに由なく離れの廣間で祝の酒宴と成り、戦後なれば略儀の配膳、主客打寛いで正八ツ時(午後二時)に引上げられた。島津隊の參謀島津小平治は大西郷に向ひ、

「今日は先生の態度が餘りに丁寧で、あれではどちらが降伏したのだから分り申さぬ。又天朝の御威光にも觸りはしまいか」と詰り氣味に問ひ懸けた。大西郷は襟を正して咳一咳、

「余もそれに氣付かんとぢやなけれども、十何代と續いた大老職の家筋殊に武士が降伏といへば恥辱の此の上なしでござすから、余があつた位謙讓して遣つても、向ふでは憚つて何の希望も陳述せんぢや。それを少しでも威張らうものなら戦々競々で何の返答も出来ないであらう。そして其の腹中には怨恨と恥辱を含み、眞の融和は逆も得られん。さすれば御城は監視の兵士も残さねばならず、又官軍が戦争に不利な事があれば、いつ反覆せぬとも限らぬでござす。依つて勉めて敵愾心を取除き、朝廷の大慈悲心に悦服せしめたので御座る」と答へられ、小平治は一言もなかつた。

其の翌朝酒井兵部、松平權十郎、松平新八郎等大西郷を訪ふて城受取の簡略から左衛門降伏待遇の禮儀の丁寧を謝し、且つ曰く、

「當城の儀は目録丈は御渡し申したなれど、官軍の兵隊も未だ御繰り込みにならず、従前の通り詰め合ひ罷り在りますれど、何れ官軍方で御受取りの上各櫓へ兵士御配備に成りませうな」

「いや拙者はからまだ山形の方へ行つて、會津へ推し寄せねばならんで、もう汝方が歸順なされ

たから拙者は汝方を同役と心得て居り申すで、御遠慮なく支配成されて下され」
「は、難有仰せ感銘仕る。然る上は城内の儀は従前通り當藩にて警備仕るで御座らう。偕又左衛門儀は當分謹慎罷り仕りまするに就いては官軍方より御目付を御付け下さりませうや」
「いや、それも面倒で、汝方も厄介ぢやらうから汝方で間違のなかごと御警護申上げて下され。領内政治向きも従前通り御扱下されて、戦後であるから十分に領民に苦痛を懸けませんことなされて下され。それから昨日申した庄内藩士處分書は今御渡し申さう」と取り出した書付一通。

庄内藩士處分書

一、出羽庄内藩士一同は當年四月以來隣藩秋田藩が薩長兩藩と共同して庄内の封疆を侵す
と誤信し屢々戦闘したるも實際天朝の官兵なりし事を隣封米澤藩より正に聞取り候に付
茲に翻然志を改めて正實歸順の誠意を表明したり依つて一同差し構ひなき者也

慶應四年九月二日

征東大總督大參謀

西郷吉之助 卍

庄内藩重役中

さあかうなると仙臺の雄藩も、南部のきかず屋も、山形も、上の山も、三春も、白石も將棋倒しに頭を下げて来る。九條、醍醐、澤三位卿も愁眉を開いた。

勝海舟が「大場所の事は大腹中の者でなけりや喝采は博されん。上野とは違ふて奥羽は舞臺面が廣いから西郷でなけりやいくまいよ」と言はれた通りで、英雄英雄を知ることはこの事ならんも一に大西郷が赤心を披瀝して人の腹中に置き、言は必ず實行し、聊か人を疑はぬからである。要するに明智も膽勇も一片至誠の發露に外ならずと信するのである。

三、天皇中心の大西郷を語る

前節に於て記述せる如く、大西郷は明治維新の大業を翼賛し奉るに當りて常に、天皇中心の精神を以て説得され、又實行され至誠を以て之に當り、敵味方の區別を立てず、渾然一體に融合せる大海の如き心を以てせられたから一も二もなく皆之に心服して、速かに天子に歸順忠誠を勵むに至つたものである。大西郷は常に後輩の者を戒諭して「大謀は無謀で只誠實忠信これが一番

よか」と言はれた。勝海舟が、大西郷に常に扈從して居つた石井蘇山氏に語られた一節を左に紹介することゝする。

明治元年の六月十日頃と覚えて居るが、石井が西郷先生の命を受けて近日歸國するので、ある日勝先生に告別ながら伺うて「是れから私の讀む本は何がよいでせうか」と問うた「ウーン本かい、本は時勢と其の人の好む所に依らねばならん。が、昔加藤清正は朝鮮征伐の時、始終論語を讀んで居るので、老臣の大木舍人が怪しんで、軍中に論語は似合はしからんではござらんか」と聞いて見たら清正笑つて「戦争前には軍學がよい。戦争中には、治國平天下の事を學ばないでは間に合ふまい」といつたので、さすがの舍人も頭を搔いたといふ事がある。今の戦争も永くはあるまい。此の小さな日本だもの西郷のやうな大腹中の人が居れば一二年でかたづくだらう。それはよしとして、おまへの性格は君側に侍するが適當と思はれるから貞觀政要をよみなさい。こりやいゝ本だよ。時に西郷も國に歸るさうかい」「ハイ先生も七月迄には御歸國に成るさうで御座ります。一寸そんなやうに聞きました」「フンいかなアそれは、まだ奥羽の極りが附かんのに西郷が歸つては、上野位の戦争は大村でもよいが、奥羽征討は場面が廣いから西郷の寛仁宏量でなくては二十六藩の意志を疏通し融和させて、心から歸服させる事は出来まいがな」「けれども

先生は軍さは俺どんよりか大村どんの方が餘ッ程上手と始終いうてをられますが。——山本附記、明治元年五月十五日、旗下八萬騎中には、勝や大久保一翁、山岡鐵太郎等の恭順派に反對する者も多數あつたが、其の中でも最も過激な集團を彰義隊と稱して、四月二十日頃から上野に立て籠つた者が約五千餘、其の外江戸市中に散在して上野と氣脈を通じて相呼應する者は何萬人あるか測り知れぬといふ情勢であつた。勝は馬上で市中を奔馳する道筋で二度も狙撃せられた。肩へ錦の中を着けて居る官軍と旗下の若武者と市中で、三々五々斬合をする事毎日々三四回もあつて、明治初年の遷卒と兵隊の喧嘩よりも多數であつた。以て殺氣全市を覆ふの状況を知るべしである。一方中央政府の京都では、長州派參與等が、大參謀西郷先生の巨網的軍略即ち殺さず攻めず、詰りが兄弟喧嘩であるからそれは避けて、天皇一視同仁の大綱で一擧一括に引き擧げ様といふ處分は、緩慢で寛大に過ぎるから、寛猛相濟うて恩威並び施さねばよくないといふ意見を奏上した。表向はさうであるが内情底意は、薩州に許り恩を施させて長州の立つ瀬がないといふにある事は論ずるまでもないことである。そして四月二十七日には大村益次郎が軍防局判事に任ぜられて、早打駕で江戸へ下つて來た。西郷先生はあんな人だから委細構はず上野攻略の全權を大村に一任してしまつた。サアそれはよいが他藩の部隊長等や參謀達が仲々おいそれと大村の指揮命

令に服さない。皆西郷の所へ指圖を受けに行つたが「俺どん軍は下手でござすけん。軍の上手な大村どんになんかんもまかせて置いてしまひましたから、おはんがたは大村どんをこの西郷と思ふて其の指圖をきいて下され、命令が一途に出んぢやア、進退呼吸が揃ひまつせんから、俺どんも軍の指圖は大村どんの命令通りにしちよります」と。そして自分が參謀長とも言ふべき大參謀の位置にありながら自ら進んで大村の指揮を受けて上野山寨の大手口である黒門口の難所を引き受けられた位で、西郷の目には長州、薩州、徳川といふやうな區別はなく、一切小異は切り棄て皇徳の下に一致せしむるに努められた……(勝)「イヤ、おまへにや分るまいよ、西郷の下で大村が軍略だけ引受けるといふことなら結構だがのう、奥羽は土地が廣いし、人間が鈍重で利害よりも情義に篤くて、その上、鎌倉以來征夷大將軍の威望のみ知つて、朝廷の徳澤の及ばぬ所だよ。こゝへもつて行つて、只大義名分の一貼張りぢやアいかんよ。そこは大摩訶な西郷が清濁併せ呑んで、海のやうに、大河小川、田の落ち水でも溝の腐れ水でも、差支なく受け容れてよ。それから大海の大徳で淨めてやるといふでなくちやア、だん／＼六ヶ敷なるだらう。たとへていへば西郷は日の光で、大村は花火の一旦光よ。おまへ歸つたら、おれがさういうたと西郷に注意してやりなさい。」と、石井蘇山は歸つてから西郷先生にかく告げたら「ウン、さうか、俺どん兵を

募つて出羽の方へ行くつもりぢや、勝どんは軍略と政治も二途ぢやアなかことをよう知つちようすたい。」。果して兩英雄の見る如く奥羽は紛擾齟齬、陰晴圖られすと云ふ状態であつた所に、前節記述の如く大西郷が乗り込んで行つて無事之を治められたのである。

勝海舟の氷川清話に曰く、おれは今迄に天下で恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南洲とだ、横井は、西洋の事も別に澤山は知らず、おれが教へてやつた位だが、その思想の高潮子な事は、おれなどはとても梯子を掛けても及ばぬと思つた事が屢々あつたよ。おれは窃に思つたのサ、横井は、自分に仕事をやる人ではないけれど、もし横井の言を用ゆる人が世の中にあつたら、それこそ山々しき大事だと思つたのサ、その後西郷と面會したら、その意見や議論は、寧ろおれの方が優る程だつたけれども、所謂天下の大事を負擔するものは、果して西郷ではあるまいかと、また窃に恐れたよ、そこで、おれは幕府の閣老に向つて、天下にこの二人があるからその行末に注意なされてと進言して置いた所が、その後、閣老はおれにその方の眼鏡も大分間遠つた。横井は何かの申分で蟄居を申付けられ、また西郷は漸く御用人の職であつた。家老などいふ重き身分でないから、とても何事も出来まいといつた。けれどもおれはなほ、横井の思想を西郷の手で行はれたら最早それ迄だと心配して居たに、果して西郷は出て來たワイ……坂本龍馬が

曾ておれに、先年屢々西郷の人物を賞せられるから、拙者も行つて會つて来るにより添書をくれ
といつたから、早速書いてやつたが、その後、坂本が薩摩からかへつて来て云ふには、成程西郷
といふ奴は、わからぬ奴だ、少しく叩けば少しく響き、大きく叩けば大きく響く、もし馬鹿なら
大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だらうといつたが、坂本も却々鑑識のある奴だよ、西郷に及
ぶことの出来ないのは、その大膽識と大誠意にあるのだ、おれの一言を信じて、たつた一人で
江戸城に乗込む。おれだつて事に處して、多少の權謀を用ひないこともないが、たゞこの西郷の
至誠は、おれをして相欺くに忍びさらしめた。この時に際して、小籌議略を事とするのは却つて
この人の爲めに、腹を見すかされるばかりだと思つて、おれも至誠を以て之に應じたから、江戸
城受渡しもあの通り立派の間に濟んだのサ、西郷は、今云ふ通り實に漠然たる男だつたが、大久
保は、之に反して實に毅然として居たよ。官軍が江戸城にはいつてから、市中の取締が甚だ面倒
になつて來た。これは幕府は倒れたが、新政が未だ布かれないから、恰度無政府の姿になつたの
サ。然るに大量なる西郷は、意外にも、實に意外にも、この難局をおれの肩に投げ掛けておいて
行つてしまつた。どうか宜しくお頼み申します。後の處置は、勝さんが何とかなさるだらうとい
つて、江戸を去つてしまつた。この漠然たる「だらう」にはおれも閉口した、實に閉口したよ。

これが若し大久保ならこれはかく、あれはかく、とそれ／＼談判して置くだらう。さりとて餘り
漠然ではないか。併し考へて見ると西郷と大久保との優劣は、こゝにあるのだよ、西郷の天分が
極めて高い所以は、實にこゝにあるのだよ。西郷は、どうも人にわからない所があつたよ。大き
な人間ほどそんなもので……小さい奴なら、何んなにしたつて直ぐ腹の底まで見えてしまふが、
大きい奴になるとさうでないノ。……「又江戸城明け渡しの談判に關する話の中に次の様なこ
とがある。さて愈々談判になると、西郷はおれのいふ事を一々信用してくれ、其間一點の疑念も
挟まなかつた。」「色々六かしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受けします……。西
郷のこの一言で江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つ事が出来、また徳川氏もその滅亡を免
れたのだ、若し之が他人であつたら、いや貴様のいふ事は、自家撞着だとか、言行不一致だとか
澤山の兇徒があを通り處々に屯集して居るのに、恭順の實は何所にあるかとか、いろ／＼喧しく
責め立てるに違ひない。萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ。併し、西郷はそんな野暮はいはな
い。その大局を達觀して、而も果斷に富んで居たには、おれも感心した。」「又勝翁の話に次の様
なこともある。江戸城受渡の時一つの美談がある。是は一翁（大久保）から聞いた話だ。あの時
にはおれと西郷との談判で、雙方五人づゝの委員を選び、城受取の式をすることにした。西郷も

一翁も其の一人で、おれは加はらなかつたが、此時は殺氣全部に充滿すると云ふ形勢で、却々油斷が出来なかつた。それで城受渡にくる官軍の委員等も非常の警戒で、堂々たる官軍の全權員の一人が狼狽の餘り片足に草履をうがちながら、玄關を昇つたと云ふ奇談も残つて居る位である。此の中に西郷は悠然として少しも平生に異ならず、實に貫目があつたといふことだ。實に驚いたことには、城受渡に關する色々の式が始まると、西郷先生居眠りを始めた。此の式がすんで外の委員が引取るも、猶ほ先生ふらりく遣つて居る。すると、一翁傍よりたまりかね、西郷さん西郷さん、式がすんで皆さん御歸りで御座ると、ゆり起すと先生ハアと言つてねとぼけ顔を撫でつゝ、悠然として歸つて行つたさうだ。一翁もひどく感心して居た。却々ふとい奴だ。數十日疲れて居たもんだから、城受渡しの間にいゝ暇見附けた氣で居眠りとは、恐れ入るではないか、畢竟こゝ等が渠の維新元勳の筆頭に數へらるゝ所だ云々。

余先年鹿兒島に歸省中、故西郷菊次郎氏尙在世中、一日訪問の折り、談偶々大西郷が明治維新の際庄内藩の歸順を取扱はれたる一條に及び、詢に感激に堪へぬと話した所、菊次郎氏が言はるるには自分も幼時の記憶にかういふことがある。即ち明治維新の大業成り、大西郷は郷里に引込んで居らるゝとき、遙るゝ庄内から酒井の殿様が尋ねて御出でになつた。相憎大西郷は病臥中

であつたので、折角御遠來のことではありますけれども、病中取亂して居るから失禮致しますと申上げると、病床でも差支へないから是非會ひたい、と申されたので、ソレではと衣服を改めて病室で御目にかゝつた。殿様は先年の禮を述べられ、其の厚意を謝する爲めの御來訪であると承はり恐縮して居つた。愈々御歸りのときは、父は玄關まで御送りしたが、殿様が玄關を出らるゝと、イキナリ表の縁側から庭に飛び降り裸足のまゝで、門への通り路の一侧に土下座をして、三指をついて平伏したのを目撃したと話された。明治維新元勳の第一人者であり、偉勳赫々たる陸軍大將でありながら少しも尊大振らず、飽くまで謙讓の美德を發揮せらるゝ點、如何にも大西郷の面目躍如たるを覺ゆるのである。

四、大西郷と大義名分

余は前節に於て、明治維新に當り、大西郷が大義名分を説いて庄内藩を歸順せしめ、一旦歸順の意を表するや今迄の朝敵も亦、齊しく天子の赤子なりと云ふ一視同仁の寛大さを以て、萬事を處置し、庄内藩を擧げて、天皇の御仁徳に感泣せしめ忠誠を心に堅く誓ふに至らしめた事を述べたが、茲には之と反對に峻嚴な態度を以て、大義名分を説かれた一例を掲げて見やう。大正六年

石井蘇山氏が皇道會の發會式の席上、九段の偕行社で土方伯にめぐり合ひ維新當時の質問をされた。曰く「明治元年一月三日鳥羽伏見の戰爭には貴藩「土州藩」の去就が甚だ曖昧であつた。或る書冊には時の貴藩の隊長は谷守部氏とあり。谷守部氏とは後年の谷干城子で、土州討幕黨の巨頭であるが、何故戰爭に去就が曖昧であつたか」と。土方伯曰く「隊長を谷としたのは誤りである。當時の隊長は今の坂井中將であつた。又土州藩兵の去就の曖昧であつたのは、土州は元來藩主容堂侯が、島津久光侯と同論の公武一致論者で、全國の諸侯一致して徳川將軍を助け、徳川將軍をして、朝廷の公卿諸公と共に皇室に忠勤せしめたいといふ持論であつた。あの正月三日の戰爭は、また名義が何とも定まらなかつた。何故幕軍と戦はねばならぬのか、土州藩に判然と判つて居らなかつた。そこで隊長から戰爭の名義を伺ひ出た。其の答へに「舊冬中朝廷では、徳川旗下及び會桑兩藩士の入京を禁止する達しが出て居る。其れに背いて會桑兩藩の大兵が入京するのであるから、朝命に逆らつて入京するのである。故に一も二もなく打拂へ」といふ返答であつた。此の返答の來る迄は土州藩の去就が曖昧であつたので、君等には異様に感ぜられたのであらう」と。石井氏曰く「土州侯島津公の公武合體説は既に聞いてゐる。あのやうでは京師に於ける議論も甚だ紛糾したらう」と。土方伯曰く「いや紛糾どころか、三條岩倉兩公も木戸、大久保諸傑も

容堂侯の佐幕論には大いに持て餘された。しかし容堂侯の議論も却々正々堂々で、無下に抑へ付けることも出来ぬ。それで到頭岩倉公が、軍賦役で廟議には餘り干與しなかつた西郷吉之助を喚んで、まだ容堂侯が去就を決せんが、此の解決をどうしたものか」と相談された。すると西郷の曰く「その解決の譯のない事でごわす。俺どん附けまつしゆう」と只一言。岩倉公も大いに面喰つて暫く考へられたが、其の譯が判らぬので「西郷さん、あなたにお任せ申せばどう解決なさるのでござんすか、一應其の筋合を聽かせて下さらんか」といふと、西郷は只黙した儘懐中から九寸五分の短刀を執り出した。そして「筋合といふた處がこれでござんす」と、ずつと岩倉公の前へ差出した。岩倉公は猶面喰つて「ハア、此の短刀をどうなさるのでござんすか」と言ふと、西郷苦笑して「長袖寬帯のおはんがたには判りますまいな。天下の大勢は始終活動して居り申すぞ。公武合體などといふのは、今から十年も前の時勢には幾分の價值がありました。今日ではもはや過去の夢となり申した。腫物は既に化膿してしまひました。老婆が幼孫に對する療治なら吸出膏藥でも貼つて置きませうが、俺どんな擧丸さげちよりますけん。こゝは一番双物ですつぱりと切開する處でごわす」と。岩倉公曰く「それぢやア、西郷さんは容堂を殺してしまへと云ふのですか」「ハイ、大阪城に四萬餘の大兵を擁する大腫物が化膿しちよりますけん。一刀突込ま

にやアならん時でごわす。時機もさうなつてゐるし、名義上からいへば朝命に背いて大兵を率ゐて入京を企つる。それなら朝命違犯でごわすぞ。容堂侯は元來勤王佐幕でごわすが、朝命に背く幕府をも佐けるちふなら、お逢ひ申して容堂を一刀の下に刺し殺してしまふがようごわす。俺どん四五度も御面會申して、御別懇の間柄で御座るから、お逢ひ申して、容堂侯結局の決心を一つ聽いて見申さう。萬一朝命に背く幕府の行動でも、土州は佐けるちゆうなら、此の九寸五分を進上します」と。岩倉公「まあ、今一應慮から話して見ますから、あなたが容堂侯に逢ふのは見合はされて下され」と。そして岩倉公は九寸五分進上の決心で容堂侯と對談されたので、容堂侯も朝命に背く幕府の行動に對しても、之を佐けるとは云ひ得ないで、去就を決せられたのであると云ふ事であつた。之を以て見れば大西郷の執らるゝ處置は、時により寛嚴宜しきを得て居らるるが、其の根本の信念は常に大義名分から出て居るのである。

此の如く大義名分を眞向に振りかざして、終始せられた大西郷が、何故私學校徒に誤られて、西南戦争を起すに至つたか一見不可解に思はれるが、余は之を次の如く解釋して居る。此の戦争の起る前、大西郷は大隅の方へ獵に出掛けて居られた。そこへ鹿兒島から迎への者が行つて、大西郷の驟起を促したが、大西郷は其の不心得を説いて應ぜられなかつた所、私學校徒が既に官の

彈藥を盗んでしまつたことを告げると、大西郷は長大嘆息して我が事終れりとして多くを語らず、一身を棄て私學校徒に與へる覺悟で歸つて來られた。思ふに大西郷は他日有事の時に當り、之に役立つ様國家有用の材を養成する目的で、私學校を造り、文に、武に、農に、全力を擧げて教育に努めて居られたるならんに、事志と違ひ、血氣にはやる若人等の輕舉盲動により、之を水泡に歸せしめたのは、大西郷の意外且つ遺憾とせらるゝ所ならんも、自分一人を全ふせんが爲め、此等多數の子弟を見殺しにする譯に行かず、事ここに至れるも我が不徳の致す所と、罪を一身に負ひ甘んじて賊名を蒙られたものと察する次第である。従つて始めより戦に勝たうと云ふ考へはなかつたものと考へる。軍を發するに色々戰略上の議論があつたけれども、上策を棄て、下策に出でられたなど、自分が引き纏めて居れば、其の儘敗軍に導くことが出来ると思つて居られたに相違ない。かういふことがある。延岡の激戦後、邊見十郎太が先生に見えて「どうも先生、官軍の兵は糞鎮（鎮臺兵は農民なれば）のくせに降伏する奴が一人もありませんから、頓と敵の狀況が分りませんぞ」といふと、先生はにこ／＼しながら「そらアなア、官軍は王師ぢやけん、全國に瀾蔓しちよる大御稜威が加護なさるのぢやよ」と答へられたとのことである。明治の十年迄の間には萩の亂あり、熊本の亂あり、佐賀の亂あり、人心恟々として不安の狀況にあつた。愈々最後

に西郷の亂があつたが、明治維新元勳の第一人者たる、大西郷でさへも錦旗に双向つては勝てない。全國に布いた徴兵令の兵士でも、結構嫖妓無比の薩摩隼人を相手にして之に打勝つことが出来た。徴兵令による軍隊も、基礎が確立して國家の干城たるの實を擧げたから、將來こんな不心得な事をやつてはいけなと云ふ教訓を身を以て示され、國家の犠牲になられたのであると自分は考へる。宜なる哉「晋どんもうこゝでよからう」とは、曠世の大偉人西郷先生が、岩崎谷本通の眞ツたゞ中で、二個の銃丸を受けた五十二歳二十六貫の堂々たる大づうたいを起し、血腥い道芝を見遣りつゝ、自ら山駕籠を搖ぎ出らるる刹那の一語である、「ハイ」と應ずる別輿の壯士も全身血を浴び、髪振り亂し、縷帶さへせぬ修羅の形、相蹴躡く兩脚踏み占め／＼のそり／＼と近寄り見れば、今し先生は正座東向、兩手を大地にしつかと衝いて遙かなる禁闕を拜しつゝ、いと嚴肅に王座に對する態度にて眼をしばたゝき口の内、「不忠の臣隆盛謹み惶みて奏請し奉る、七生十生はおろかな事、萬世無窮におつかへ申す精神なれど、斯く前狼後虎逼りつれば今は只この肉體だけの一世の暇枉けてお許し賜はりたし」と申し乞はるゝ折であつた。いつかな大敵に出逢つた時でも何の糞と三尺の秋水と七寸の草鞋で、蹴散らし／＼砲聲銃丸の驟雨と飛び來る中でも鳩に播かるゝ大豆にも感ぜぬ豪膽な別府晋助も、これを見ては耐らず不覺の涙に咽んだ。やゝあ

つて先生は今朝着替へた晴着の襟筋うしろへ押しつけ、前へ突き出す肥大の頸筋、合掌瞑目、最後の一聲「晋どんたのむ」、「ハッ先生御免」と雷光一闪、嗚呼無慘流石の大英雄もこゝに一切無我に歸してしまつた。之と同時に先生の生命として懷抱して居られた、東洋經綸てふ遠大の壯圖も亦空に歸してしまつたやうに見ゆるも、余は信ず、其の英靈は幽界に於て一層強く働き、日清日露、日獨戰爭を経て、遂に滿洲事變となり、又今日の日支事變に當つて活躍して居らるゝことと信ずる。好機に投じて斷の一字を缺きたる爲め東洋經綸も却々の難事である。征韓論のとき先生の説行はれしならば、如何なる大展開を容易くなし得たであらうかは想像に難くない。余はかかる考へを以て居りし折柄、幼稚舎時代の同窓の友小浦榮太郎君來訪しての話の中に、同君の幼時勝海舟の家にも出入せしが、或時揮毫して頂く爲め硯に墨を摺つて居つたところ、海舟先生子供の小浦君に教へて言はるゝに、俺が作つた城山の琵琶歌に「亥の歳以來養ひし腕の力も試めし見て、」云々とあるを西郷が私學校生徒を養成した力の如く、世人は早合點するもアレはさうではない。之と反對に徴兵令を布いて國民皆兵とした、結果の軍隊の力も之で試練して確かだと官兵の強いことに満足した意であると言はれたさうだ。之を以て見ても、余が前述せる愚見も海舟先生の見らるゝ所に一致して居ることを知り、欣喜に堪へぬ次第である。要するに此の一節を通

して大西郷が大義名分に立脚して居られたことが分る。

五、至誠は治國平天下の要諦

明治天皇の御製に

ちよろづの民の心もをさまらむ

誠ひとつをもてをしへなは

と仰せになつて居る。大西郷は常に天皇中心を以て萬事の處置をせられ、大義名分の上に立脚し至誠を以て動かされた。實に 明治天皇の御聖旨によく合致して居られたものと思ふ。其の遺訓に曰く「事大小となく正道を踏み、至誠を持し決して詐謀を用ふべからず。人多くは故障生ずる時に臨み、詐謀を以て其の故障を通過すれば、其他は憂ふるに足らずとなせども、詐謀の弊必ず生じ、事必ず破るゝものなり。之に反し、正道を以て行へば目前には迂遠に見ゆるとも成功は却つて早し」又曰く「廟堂に立ちて大政を理するは、天道を行ふものなり。故に公平無私、正道を踏み、賢人を探り、能く其の職に行ふる人を用ひて政柄を執らしむるは即ち天意なり。故に眞に賢人と認めれば直ちに我が職を讓るの誠心なかる可からず。如何に國家に勤勞あるも其の職に行へ

ざる人を官職を以て賞するは甚だ誤れり。官は其人を選びて之を授け、功有れば之を賞し、之を愛すべし。是れ徳と官と相配し、功と賞と相對するの義なり」。又曰く「人を相手にせず、天を相手にすべし。天を相手にして己れを盡し、人を咎めず、我が誠の足らざる所を尋ぬ可し」と。此等の遺訓には、大西郷の面目躍如たるものがある。言々天の道ならざるなく、至誠ならざるはなす。

大西郷と肝膽相照らした、勝海舟翁も亦次の如く言つて居らるゝ「政治家の秘訣は何もない。只々正心誠意の四字ばかりだ。此の四字に據りて遣りさへすれば假令如何なる人民でも、之に心服しないものはない筈だ。又假令如何なる無法の國でも故なく亂暴するものはない筈だ。所で見なさい、今の政治家は僅か四千萬や五千萬足らずの人心を收攬する事の出来ないのは勿論何時も列國の爲めに、恥辱を受けて獨立國の體面をさへ全うすることが出来ないとは如何にも齒痒いではないか、つまり彼等は政治の秘訣を知らないからだ。よし知つて居ても行はないのだから、矢張り知らないのも同じことだ。何事でも凡て知行合一でなければいけないよ、そこで先づ内政の事にしろ、畢竟此の秘訣を知らないから、何事でも杓子定規の法律萬能主義でやらうとする。それは理窟は却々つんでも居やうが、どうも法律以外理窟以上に、云ふに云はれぬ一種の呼吸があ

つて知らず識らず民心を纏めると云ふ風な妙味がない。」云々。

所が從來至誠などは馬鹿正直な話だ。よろしく權謀術數によつて要領よくやつて行く方が政治の要諦であるかの如く考へて行動して來た政治家が多かつた様に思はるゝが、其の結果は如何であるか、具眼の士でなくともわかることと思ふ。余は、大西郷や海舟翁の説に賛成するものである。尙 明治天皇の御製を拜誦すると洵に恐懼に堪へない次第である。

六、結 言

前數節に述べたる如く明治維新に當り、大西郷は力よりも心に重きを置かれた。策略なしの無策無謀で只至誠一つを以て萬事に當られた。法文のみに拘束されずにお互に赤心を披瀝して信を措く點にあつた。而して天皇を中心にして總ての心を歸せしめ、力を統一綜合して偉大なる功績を捧げられた。第一節に述べたムツソリーニ首相の政治の仕方は始めが力を以てした故、其の成績如何を考へて居つたが、思つたよりは案外安固である。彼は矢張り私心を去り、凡てを國家に捧げ至誠を以て公平に萬事を處理して行き、國民支持の基礎の上に立つて居るから土臺がしつかりして居る。往年伊國訪問の後西國も訪問したが、時の宰相侯爵ブリモデリベラ陸軍大將は、ム

ツソリーニ首相に私淑し、十年間は總理大臣を勤め徹底的に共產黨などを撲滅すると豪語して居つたが、年を経ずして覆へされ、亡命して巴里に客死した。ム首相と同じ様に努力して居つても基礎が軍部支けで未だ國民全體と云ふ譯に行かなかつた所に弱點があつたらうと思ふ。之に反し我が日本に於ては、國體が他に比類のない世界唯一のものであるから國民をして、天皇陛下の御稜威の下に歸せしめ、大御心を奉戴して仁政を行はゞ、億兆一心天壤無窮の皇運を扶翼し奉ることが出来るのである。國際間に於ても矢張り同じ心構を以て處すれば、ヤガテ八紘一字の天業御遂行に翼賛し奉ることも出来るのである。

明治天皇御製

よもの海皆はらからと思ふ世に

なと浪風のたちさわくらむ

今上陛下御製

靜かなる神のみその朝ほらけ

世のありさまもかれとそおもふ

吾々はかゝる難有き大御心を常に念頭に戴き大いに奮勵努力せねばならぬ。

附録 日本精神作興の根源

軍艦出雲を永久に生かせ

軍艦出雲は日露戦争前出来上がった。其の當時世界的に優秀な装甲巡洋艦である。同艦には出雲の國の人達から贈られた稲田姫の御神像と神酒甕と大杯がある。日露戦争のときには第二艦隊司令長官上村彦之丞中將の旗艦であつた。明治二十七年二月九日旅順沖の海戦に初陣をした後で上村長官は將官室に准士官以上を呼び、一人々々に自ら柄酌で神酒を大杯に注がれて戦捷を祝された。同年八月十四日の蔚山海戦のときには御神像の安置してあつた將官食堂は敵弾の爲め目茶目茶に破壊され、器物皆顛倒墜落したにも係らず、御神像のみは少し向きが換つた位で安全であつた。日本海々戦のときも無事であつた。余は日露戦争中次の如き狂歌を作つた。

上村が いくさ加藤と勇むなり 出雲變らぬ元氣にて

出雲勝て出雲も安かれ出雲艦出雲の神や出雲守らん

戦争の初年期は加藤友三郎大佐が參謀長であつたから、之をも一ヶ所に讀み込んだのである。日露戦争中東郷長官の旗艦であつた三笠は危き運命を幸運にも逃がれて永久に保存さるゝことになつた。其後軍艦出雲は世界大戦に際し第二遣外艦隊司令官の旗艦として遂に地中海迄出動して輝かしい武動をたてた。

過ぐる滿洲事變後の上海事變のときは野村第三艦隊司令長官の旗艦として三度輝かしい武動をたてた。今回の支那事變に當りては長谷川第三艦隊司令長官の旗艦として幾度か飛行機の爆撃や砲銃弾や水雷の攻撃を受け何等損傷を來さなかつた程幸運の艦である。聞く所によれば上海で外人仲間て幸運の表徴として尊敬され、激戦中の某日彼等の會合の席上談偶々今上海で何處が一番安全だらうかとの間に對し、異口同音に、ソレは軍艦出雲だと言つた位神秘的幸運の軍艦である。それが今回の支那事變に限られたのではなく、日露戦争を初陣に四回までも世界注目戰場にあつて嚴然たる威容に何等の傷を受けず、赫々たる武動をたてた。かうなると最早三笠以上の輝かしい戦歴を経た軍艦である。せめて佐世保軍港あたりに永久に保存することゝし、以て東に三笠あり、西に出雲あり、之に依つて獨り日本海軍の士氣のみならず、日本國民の精神發揚に資したきものである。

億兆一心

國民の中には色々のものがあつて、決して一樣ではない。金持もあれば貧乏人もある、賢い人もあれば愚かな人もある。男もあれば女もある、老人もあれば子供もある。従つて金持には出来ても貧乏人には出来ない、賢者には出来ても愚者には出来ない。男には出来ても女には出来ない、老人には出来ても子供には出来ない。と云ふやうでは決して九千萬同胞の心を一にすることは出来ない。貴賤貧富、老若男女を問はず、あらゆる方面の人々でも、容易に出来るものでなければならぬ。

此は至誠の外にはない。それで億兆一心天壤無窮の皇運を扶翼し奉るには、九千萬同胞が至誠を捧げて、天皇陛下を中心に歸一し奉り、其の御稜威の下に天の至上命令を忠實に果すことである。それには明治天皇の下し給へる、教育勅語は日本精神の結晶であると信ずるから、此の勅語を奉戴して實踐窮行することが日本臣民の盡すべき道である。

惟神の大道に行き詰りなし

今次の事變が永引くにつけ、各方面に色々な影響を來たすので、愈々困難が加はつてくる。今に金が缺乏した、物資がなくなつた、といふ様な場合に到達せぬとも限らぬ。併しそれで吾人は行詰つた、ドウにもならぬ、と悲鳴を擧げてはならぬ。トトトトトトと云ふのは、數字の公式であるから、普通吾人は之を金科玉條となし、最早此れ以上一步も出ることには出来ないと考へる。併し現に戰場に於て、第一戦に奮闘して居る勇士を見よ、目にあまる大敵に當り、時には一週間も喰ふや喰はずに戦つて居る。銃丸盡きて石ころなどを投げて戦つて居る。それで難攻不略の險山要地を抜き、何時も連戦連勝して居る。即ち百人力も千人力も萬人力も出して居るではないか。それは一プラス一は百となり、千となり、萬となると同様だ。こゝに一石の水があつた、一石汲んだからもう空つぽになつたではいけない。井戸の如く、泉の如く、滾々として湧き出て汲めども汲めども盡きない様にあらねばならぬ。西洋崇拜の心を去り、思を惟神の大道に注げ、古事記にある通り天地初發のときになりませる。天の御中主大神より高御産巢日神産巢日神に分れ、それより段々と生成化育の發展をなされ、ムスビの作用は永久に千變萬化して窮る所がない。太宇宙の運行の續く限り、ムスビの作用は停止することはない。此の惟神の大道に順從して行けば、決して行詰る所はない。同じ日本人でありながら、戰場に於てのみ千人力、萬人力

が出る譯のものでない。總ての日本人が眞劍になり、眞に日本精神を發揮すれば、皆出来るのである。内地にあるも、銃後にあるも、殊に國民指導の位置にあるもの大いに此の力を發揮せねばならぬ。然らざれば皇祖皇宗の御遺訓に對し奉りて申譯ないことであり、皇運扶翼の責任を全ふすることが出来ぬ。

文 德 武 功

何と言つても素晴らしいのは第一線に活躍する海陸空軍の勇士達の奮戦である。逆でも人間業とは思へない神業である。世界も嘸かし我が神武には驚嘆して居ることであらう。併しながら兎角世界は日本を誤解し勝ちである。恰も切り取り強盜か侵略者の如く考へて居る。反感こそあれ却々好意は持つて居らぬ様であるから、眞の日本精神や眞の日本の姿を掴みきれないのである。従つて 明治天皇の御製に拜する

四方の海みなはらからと思ふ世に

なと波風のたちさわくらん

と仰せられた。四海同胞共存共榮平和を念とし玉ふ大慈大悲の大御心は、未だ世界各國民の心底

に徹して居らぬ。武力は一時の征服には必要であるけれども、永久の統治には適せぬ。矢張り之には文徳に依らねばならぬ。而して武力の優秀にして世界無比なることは各國齊しく認めて居る所である。然るに此の武に優るとも劣らぬ文も亦日本にあることを知らぬ。此の文の優秀無類なることを世界に示せば、必ずや驚嘆して心服して來るに違ひない。彼の古事記の如き却々意味深長にして、只其の表面を見たのみでは了解容易なことでない。我が國民でさへ、只一種の神話位の考へで看過して居る。況んや外國人に於てをやである。宜しく日本に傳はつて居る最古の文書(ウヰツツイ、コトクワ)(上文とか言靈とか器教等色々のもの)等につき、日本精神の依つて來たりし根源や其の崇高にして宇宙の大法則を示して居る所以を研究して、日本の優れた文徳を示さねばならぬ。此くて文武相併行して初めて御稜威が輝き渡り、八紘一宇の天業が完成せらるゝものと考へる。

天地の恩恵を知れ

世の中の人には値段の高いもの程、吾々に大切なものはない様に思ふのであるが、人間に絶對缺くべからざる必要のものはそんなに高價なものではない。馬鹿に高價であつては貧乏人はどうにもならぬ。それでは神様も不公平である。所が神様は誠に公平である。お互に先を争ふて奪ひ合

ふこともなく、又之を得る方法に苦心することなく、自由自在に代價を拂ふこともなく得られる様にしてある。

第一が空氣である。之は自分の隣に如何なる異國人が居つても平氣である。又佛教信者の隣に基督教信者が居り、其の隣に回教徒が居つても、少しも他を排斥せずお互に吐き出したり吸つたりして居る。而して之を只で頂戴して居るが、一旦空氣を呼吸することが出来ないで死んでしまふ。次は太陽の光線である。日光も一視同仁無代價で各人を生成化育——生命を與へて居る。次は水である。之は水道代を少しばかり拂ふけれども、只で得られる所もある。

此の如く人生に最も必要なものは、神様が容易く得られる様に仕組んで居られる。吾々は思をこゝに致して、高價なものに憧れる必要はない。神の大慈悲天地の恩恵に對して常に感謝の念を捧げねばならぬ。

昭和十三年十二月廿三日印刷
昭和十四年一月五日發行

版權
所有

天皇中心道（續編）

【非賣品】

東京市豊島區雜司ヶ谷町一ノ四

發行所 渡邊卓哉

東京市芝區田村町六ノ十三

印刷所 日本協會印刷部

東京市豊島區雜司ヶ谷町一ノ四

發行所

日本協會出版部

電話牛込(34)四九八七番
振替東京一〇七、九三〇番

387
249

最新 住宅讀本

推薦の辭

三輪田高等女學校長 三輪田元道

——かういふ本を、女學生なり主婦なり、而して男子の方にも大いに讀んで貰つて、——ここだと思ふところを取り入れたら、非常に幸福な生活が出来はしまいか——何人も一應讀んで然るべき良書である。

松村英一

資料豊富に、加ふるに平明親切なる御文章、興味深く覺え申候。住宅は人間にとつて最も密接な關係を有するもの、御高著に依つて教へらるるところ多大なりしを感謝いたし候。

日本電話建物出版部
 著保善尾平 長會役補取
 〇六七版圖入挿 頁餘〇五六版菊
 附引茶量器架建 頁餘〇六二ト一ア
錢十五圓三 定價
 錢二十二 地内 料送
 錢二十六 湖・餅・樽・壺

内容見本贈呈 發行所 日本電話建物出版部
 全國書店に有り 振替東京一三七五〇

終